

公表

児童発達支援事業所における自己評価総括表

○事業所名	ユニバーサルスポーツLet's Try		
○保護者評価実施期間	7年 3月 1日 ～ 7年 3月 31日		
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	4 (回答者数)	3
○従業者評価実施期間	7年 3月 1日 ～ 7年 3月 31日		
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	11 (回答者数)	11
○事業者向け自己評価表作成日	7年 4月 15日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的にやっている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	利用者様目線のサービス提供 利用者様のニーズを的確に捉え、個別支援計画に基づいた柔軟なサービスを提供しています。 日々のモニタリングやご家族との連携も丁寧に行い、安心してご利用いただける環境を整えております。	家族との連携・フィードバック 保護者様と日々の連絡帳や面談を通じて連携し、ご家庭での様子や悩みにとも耳を傾けております。 ご家庭と協力しながら、療育が生活全体に良い影響を与えられるよう努めております。	保護者様との連携強化 ご家庭での生活や発達の変化と事業所での支援がより一体化できるよう、保護者様との情報共有をさらに深めていきます。 面談の頻度を見直し、ご家庭でも取り入れられる運動や関わり方のアドバイスを積極的に行っていく予定です。
2	多職種連携による支援 保育士、児童指導員、作業療法士などの多職種が在籍しており、専門性を活かした支援を行なっています。 必要に応じて学校や保育園とも連携をとり、児童のよりよい成長環境づくりに努めております。	職員間の連携と振り返り 毎日の活動後にはミーティングを実施し、児童の様子や支援方法について共有・改善を行っています。 職員間の連携を密にすることで、支援の質の向上に努めております。	職員スキルの均一化とチーム力の強化 職員間で支援の質にばらつきが出ないよう、マニュアルや実践例の共有を進めるとともに、定期的なケース会議やロールプレイを通じてスキルの統一を図ります。 また、職員の強みを活かしたチーム支援体制づくりにも取り組んでいます。
3	遊びと学びのバランス 楽しさの中に学びを取り入れたプログラムを提供し、社会性・コミュニケーション能力の向上を図っております。 集団活動と個別活動のバランスを取りながら、児童の主体性を尊重した関りを行っております。	一人ひとりにあった運動プログラムの設計 児童の発達段階や特性、興味関心に合わせて、個別に運動メニューを調整しております。 苦手な動きにも前向きに取り組めるよう、段階的なステップや成功体験を大切にし、「できた!」を積み重ねられる支援を意識しています。	環境・設備の充実 児童の活動意欲をさらに高めるため、運動器具や療育道具の見直し・拡充を進めていきます。安全性と楽しさを両立させた環境づくりに引き続き力を入れ、児童が安心してのびのびと過ごせる空間を整備していきます。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	安全委関する課題 避難訓練や緊急時対応の取り組みは実施しているものの、一部の想定(例：不審者侵入対応)については訓練の頻度が十分とは言えず、職員間での対応手順の共通理解にもばらつきが見受けられます。また、ヒヤリ・ハット事例の報告は行われているものの、それを活用した定期的な検証・改善の機会が十分に確保されていない点が課題として挙げられます。	年間訓練計画の策定不足 訓練の実施が都度の判断に委ねられていたため、業務の繁忙等により一部訓練の実施が後回しになる傾向があった。	全職員が緊急時において迅速かつ適切に対応できる体制を整備するため、年度計画に基づいた定期的な避難訓練(火災、地震、不審者対応等)を確実に実施します。また、安全マニュアルの見直しと職員間の情報共有を強化し、ヒヤリ・ハット事例を活用したケーススタディを通じて、リスクマネジメント意識の向上を図ってまいります。
2	支援の標準化と記録の整備 支援内容が職員によって若干のばらつきがあることが課題です。職員間での共有が不十分な場面もあり、支援記録やマニュアルの見直しを進め、支援の統一と連携の強化を図る必要があります。	支援内容や児童への関わり方において、職員の経験年数や専門性に差があることが影響しています。 また、マニュアルや共有資料の整備が不十分の為、個々の感覚に頼った支援になってしまう傾向があります。	支援のばらつきを減らすために、支援マニュアルやチェックリストを整備し、全職員で共通認識を持てるようにします。 さらに、ケース会議を定期開催し、職員間での情報共有や振り返りの時間を重視していきます。
3	運動環境の制限 現在の施設環境では運動スペースに限りがあり、複数児童が同時に十分に身体を動かすには制限を感じる場面もあります。 今後環境整備や時間帯の工夫を通じて、より効果的な運動療育の提供を目指します。	施設の物理的な広さや構造に限界があり、複数児童が同時に運動できるスペースが確保しづらい状況です。設備投資にはコストがかかる為、大規模な改善がすぐに行えない現実的な制約もあります。	限られたスペースでも効果的に活動あ出来るよう、タイムスケジュールを工夫し、小グループ制での運動プログラムを実施します。 今後、遊具やマットの見直し・配置変更も行い、安全で効果的な動線づくりを進めます。